

「繋がり」を広げて、温かいまちを創る

一般社団法人 SHOIN 理事
小池一博

一般社団法人 SHOIN

我々は2017年10月に子どもたちの居場所づくり実行委員会として発足し、2018年1月から第2・4水曜日に「こども食堂あゆみ」を、2020年3月にコロナ禍となると東京都北区初のフードパントリーである「フードパントリーららら」をスタートさせました。

また夏休み明けの9月は子どもたちの自殺率が多いということから、夏休みの思い出と自己肯定感を得られる体験をプレゼントする「夏休みこども農業体験」や、地域の大人たちによる職業体験により、楽しみながらお仕事を考える機会とする「キャリア教育職業体験」といったイベントも行っています。

2022年4月に法人化し、全ての子どもたちが、心身共に健全で、自らの将来の視野を広げながら成長していくことに寄与することを目的に活動を行っています。

SHOINは“松陰”と“勝因”からきています。吉田松陰の言葉に「学問とは、人間はいかに生きていくべきかを学ぶものだ」とあるように、子どもたちにとって生きる経験を提供したいという想い、人生の中の困難に打ち勝つために必要な経験や人との出会いを提供したいという想いから、この法人名としました。

私はSHOINの他に、株式会社ヴィルトゥススポーツクラブの代表をしております。私自身も20年以上子どもたちへサッカー指導を続けている他、ビジョントレーナーとして発達障害の子どもたちに見る力を育む指導も行っています。

大学を卒業してからスポーツというツールで子どもたちに携わってきましたが、もっと多くの子どもたちのために何かしたいという想いもあり、SHOINの活動を通して、さらに多くの子どもたちと携わることができることは、この上ない喜びです。

しかしながら、私自身が人生で携わることのできる子どもたちの数は限られています。自身では有

限であっても、仲間や賛同者、ステークホルダーや未発達な地域資源も含めて、共に連携・協力し合いながら、持続的であり、柔軟性ある仕組みづくりと繋がり構築を行うことで、まちをより良くできると感じています。

我々の活動の位置づけ

下の図は横軸をターゲット、縦軸を役割として、我々のプロジェクトの位置づけを表したものです。

「こども食堂あゆみ」は誰でも受け入れており、共生型の活動です。反対に「フードパントリーららら」や「コミュニティフリッジ王子本町」は、ひとり親世帯や生活困窮者に限定しているため、ケア型の活動となります。「夏休みこども農業体験」は、夏休みに家族でお出かけができない方を対象としているのでケア型寄り、「キャリア学習職業体験」は、子ども食堂や学習支援を利用する子どもたちから一次募集するものの、広く募集をしているため共生型寄りと言えます。

“全ての子どもたちに”届けるために、共生型からケア型まで点ではなく線になる活動を目指しています。また前期の活動は全て拠点型の支援ですが、より貧困等対策で個別対応していこうと思うとアウトリーチ型

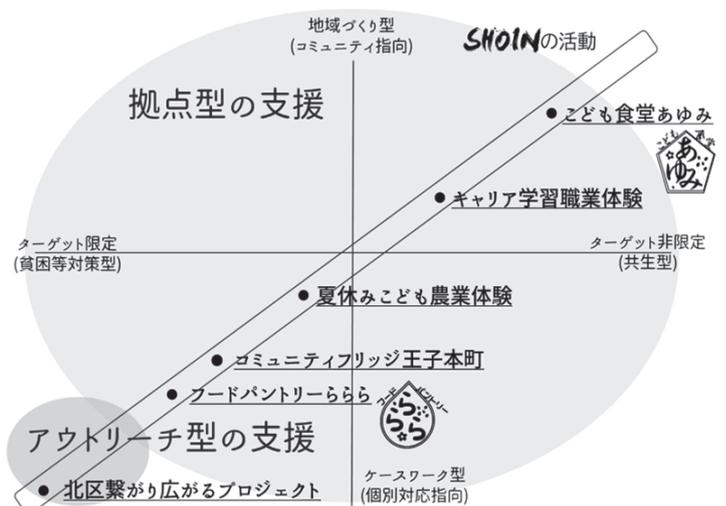


図 SHOINの活動

の支援が必要となり、2021年6月からは、北区内の子ども食堂運営団体の力も借りて「北区繋がり広がるプロジェクト」を開始しました。

北区繋がり広がるプロジェクト

北区繋がり広がるプロジェクトは、支援をする側が支援を必要とする子どもたち・家庭に出向き、見守りや相談などを続けていくアウトリーチ型の支援活動です。

コロナ禍において、子ども食堂はテイクアウト形式が主となり見守りの時間が短くなりました。またフードパントリーも、全ての利用世帯がお子様連れで食料品を受け取りに来るわけではないため、子どもたちの見守りは十分なものではありません。

これでは本当に支援を届けたい子どもと出会うことはできません。また、本当に支援を必要としている子ども・家庭は、支援が必要な状態であっても、助けを求める感覚が鈍化していたり、支援に関する情報を持っていない方が多くいます。

政府も2022(令和4)年度から「支援対象児童等見守り強化事業」を本予算に組み込みました。子どもの見守り機会が減少し、児童虐待リスクが高まっていることから、行政・児童相談所・学校・教育委員会・民生・児童委員等の他に民間団体等にも幅広く協力し、地域ネットワークを総動員して、地域の見守りの体制を強化することが求められています。

アウトリーチ型の支援活動は、コロナ禍でより浮き彫りになった、より赤信号に近い子ども・家庭への支援として必要であると感じています。

本プロジェクトの具体的な取り組みは下記となります。

1) 訪問員(アウトリーチャー)を増やす

日頃より区内ネットワークを通して、信頼して交流させていただいている子ども食堂運営者の方々に、アウトリーチ型の支援が必要な子ども・家庭があれば、訪問員(アウトリーチャー)となってこのプロジェクトと一緒に進めさせていただきたいとお話して、協力いただいています。

2) アウトリーチしたい世帯に利用登録してもらう

アウトリーチを必要している子ども・家庭に対して、いきなり訪問して見守ることはもちろんできません。訪問員の方にチラシをお渡しし、日頃の活動の中でア

ウトリーチを必要と思われる子ども・家庭がいれば利用登録していただきます。

本プロジェクトのチラシには「地域の繋がりが希薄と言われる昨今ですが、地域の子どもたちと地域の大人達が顔の見える関係性となり、見守れる地域となれたらと思います。」と記されており、利用してほしい方に対しても、社会課題を解決するために、共にこのプロジェクトを参加しましょうと促します。

3) プレゼントを準備する

我々が月ごとに異なるプレゼントを準備し、訪問員の皆さんに届けます。訪問員の皆さんは、このプレゼントを直接子どもたちに渡すため、訪問する日時を、利用世帯と調整して決定していきます。

4) いざ訪問!

訪問員が月1回プレゼントをお持ちし、子どもたちやそのご家族と顔を合わせます。そしてたくさんの会話ができる関係をつくり、相談事を聞くことによって、確かな繋がりをつくっていきます。

その中で、子どもや家庭に潜在する課題を発見し、必要性があれば支援に繋げることができます。これは子どもを取り巻く家庭環境を含む包括的な支援となります。

子どもたち・家庭の環境に合わせた支援

アウトリーチ型の支援は大切ですが、支援をお届けする子どもたち・家庭を把握できていなければ、アウトリーチ(訪問)を実行することはできません。子ども食堂やフードパントリー、学習支援、その他様々な体験活動などの拠点型の支援活動を継続しているからこそ、日々子どもたちや家庭の存在を知り、見守ることができるはずです。

また拠点型の活動を継続する中で、他団体の子ども食堂や社会福祉協議会、民生・児童委員、学校、地域住民、行政機関などとの関係性から子どもたちを把握することもできてきます。だからこそ、様々な背景を持つ子どもや家庭の実情に合わせて、拠点型・アウトリーチ型の両方の支援ができることが重要と考えています。

私も訪問員(アウトリーチャー)として活動しています。貧困の中で生きる子どもたちの実状は、経済的

な困窮だけでは捉えきれない複雑なものです。アウトリーチを繰り返し実施する中で、その実状を裏付ける家庭の背景が見えてきました。

子どもや親が精神疾患・発達障がい・知的障がいを抱えている、アルコール依存症で子どもに暴力を繰り返している、うつ病もあり自殺することを考えてしまう母親、保護者の乱れた性行動、保護者のうつ病、親やその交際相手からの虐待、不衛生な生活環境があります。

子どもたちは、プレゼントを渡して喜ぶ表情を見せてくれると共に少しずつ学校生活や進路の悩みを打ち明けてくれます。保護者も、現状の悩みを時に涙ながらにお話ししてくれます。会話の中で、我々ができるサポートの他、行政支援や他の民間団体が行っているような支援を紹介することもあります。

私ができることは、顔が見える関係性をつくりながら、定期的に伺い、安否や心身ともに健康であることを確認し、相談相手になっていくことです。行政支援と併せて地域の大人と繋がり、緩やかに見守りを続けていくことが必要と考えます。

三つの繋がりから広げていく

本プロジェクトは現在、東京都北区内で10名の訪問員がアウトリーチ型の支援を行っています。まだまだ北区全域をカバーできていません。

一つ目の繋がり、もっともって人と人、地域の大人と子どもが繋がっていくことが必要です。

訪問員を増やして、支援を必要としている子どもたち・家庭との繋がりを広げていき、見守りの網の目をさらに細かくしていく必要があります。

子ども食堂や子育て支援団体などの運営者、民生・児童委員、児童主任委員、保護司など日頃から子どもたちと繋がっている方とさらに連携し、アウトリーチが必要な子どもの家庭の扉を開けてもらう手段として、本プロジェクトを広げていかななくてはなりません。

幸いにも訪問員として活動していきたいといった方々の声が増えてきており、これからも地域の大人が、地域の子どもたちを支える仕組みづくりと繋がりを創出していきます。

二つ目は、福祉分野の発展のために、企業・経済団

体の結びついたプロジェクトにすることを目指します。

北区に大変縁のある渋沢栄一翁は、現在の社会福祉法人社会福祉協議会や全国民生委員児童委員連合会の初代会長であったように、日本の資本主義の発展に大いに貢献しただけでなく、慈善事業にも積極的に取り組んでいました。

こちらでも渋沢栄一翁が初代会頭であった東京商工会議所の北支部と協力し、区民や地域企業の支援が本プロジェクトに必要となる1世帯毎月1,000～1,500円のプレゼントになり、その支援で緩やかに地域経済も回るような仕組みをウェブ上に作っています。

その家庭の問題といった他人事ではなく、地域で起きている自分事の社会課題と捉え、地域の人々で解決に向かう機運をつくる必要があります。

三つ目が、民間団体と行政の繋がりです。

民間団体同士は地域ネットワークを通じ、年々連携がとれてきました。様々なハードルはあるかと思われませんが、行政と地域ネットワークである民間団体が連携し、行政との相互通行の情報のやり取りができれば見守りは強化されるはずで

子ども家庭支援センターや児童相談所といった行政支援でできること、子ども食堂などの民間支援でできること、それぞれに役割と必要性があるはずで。そういった互いの役割を謙虚に認め合いながら、歩んでいく必要があります。

本プロジェクトは、北区政策提案協働事業にも申請しており、官と民がさらなる連携を進めていくきっかけとなることを目指しています。

今後の SHOIN

幕末の動乱の時代に、吉田松陰は「諸君、狂いたまえ」と、これまでの常識だけに捉われずに行動することを周囲に求めました。我々もまた率先して行動していきます。そのためには、我々だけではなく、地域の人と人、人と地域資源、官と民などとの繋がり力を信じ、それを広げていくことが必要不可欠です。

この東京都北区が、そういった繋がりのもとで、より良いまち・温かいまちとなっていくよう、そしてそれが日本全体のモデルケースをなっていくような活動を今後も行ってまいります。